



《よもの海 みなはらから  
と思ふ世に など波風の  
たちさわぐらむ》

年頭、この明治天皇の御製  
歌に触れ、あの激動の時代に  
「慈しみ」の思いをつづられ  
ていた胸中に私は改めて深い  
感銘を受けた。

歴史は繰り返すというが、  
近隣諸国を見渡せば、今の日  
本はまさに暗雲立ち込める危  
機状況にあるようだ。たと  
え、どんなに海が荒れ、嵐に  
見舞われようとも、もしかし  
たら深海は静けさで満ちてい  
るかもしれない。人類の命は  
どこかで皆、一つにつなが  
ってきたものだから、きっと私  
たちは悲劇を回避できるはず  
だ、と祈るような気持ちにな  
ってしまう。

どうか今年、地球上が平安  
でありますように。

世界は女性リーダーの決断  
に注目しつつある。ドイツの  
メルケル首相、オリンピック  
開催国ブラジルのルセフ大統

「生命の歌」今年も日本から



領、そして、アメリカに初の  
女性大統領が誕生するかもし  
れない。

女性だから話題になり、特  
殊なのではなく、その偉業や  
才能はすべて「個人の能力の  
違い」だと私は考えている。

しかし、女性は明日の命を  
自らの胎内に宿し、守り、育  
み、命をつなぐ。女性の特性  
として遺伝子レベルでその使  
命と本能に「愛と慈悲」が備  
わっているなら、もしかした  
ら人類を救えるかもしれない。

女性、男性を問わず、普段  
は個人差、個体差を信奉して  
いる私ですら、こんな期待を  
抱きたくなるほど、世界は一

触即発の緊張に満ちている。  
だから、今必要なのは男女問  
わず、倫理観と徳性を養った  
真のリーダーだろう。

日本人は万葉の時代から歌  
を愛し、その中に人が生きる  
さまざまな喜び、悲しみとい  
った感情を映しながら、生き  
る意味や願いを込めてきた。

「もののあはれ」は単なる刹  
那の感傷ではなく、根底に深  
い生命の哲学がある。

新年、歌会始に一年が始ま  
り、紅白歌合戦に一年が終わ  
る日本から、生命の歌を紡い  
でいきたい。

(さとう・しのぶ=声楽家)  
=毎月第3金曜日掲載

